

コロナ禍の中、久しぶりに雨音をききながら穏やかな休日を通して。

そんな時、ふと昔のことがよみがえった。

産業カウンセラー養成講座を受けたのは42歳。いわゆる人生の折り返し地点、ユングの言う「人生の正午」だった。介護や家

ナビゲーター

庭の事情もあって受講するまで2年かかった。あの時は背負うものが多くて、「なんでこんな自分だろう!?!」と思っていたので、自分を変えたかった。そのため何をしたらいいのかを探していたような気がする。そして、何人もの出会いの中から養成講座

10

産業界の現場から 相談者の思いに共感して

自律と人間的成長への生涯学習

を知った。というより求め続けていたら情報が飛び込んできたといった方がしっくりくる。

仕事も家庭もあったが10カ月間せつせと講座に通った。ロジャーズの「人は一人ひとり違う存在であり、発展し成長する存在」という人間観が新鮮で、心理学の理論も面接実習もスポンジのように私の中に入っていた。もちろん、自分に向き合うことが苦しい時もあった。言葉にすることで自分の背景にあるものを理解し、劇的に変化したわけではない

養成講座のこと

が、少しずつ楽になっていった。あの時の体験があったからいま、心が通いあったなあという、ふんわり温かいものを実感できていると思っている。

資格をいただいた時は、「これで修了じゃない、これから勉強のスタートだ」と強く思ったことを覚えていて、さらに学ぶことが楽しかった。

現在に視点を移すと、教育場面では体験学習が重視され、社会の中では多様性やジェンダーフリー、ハラスメントなどの情報が人間

尊重の大切さを訴えていると感じる。

いま思えば、自律と人間的成長を目的に据えながら、今日まで私が学んできたことはずっとずっと以前から問われ続けていて、それだけに人として大切なことであり、現代を生きる人にも決して無縁ではないと思わされる。人を理解するということは奥深く100人いれば100通りの生き様があり、自分のこともまだまだわからない。思ってもいない自分や他者に出会うことで新しい発見や刺激があり、私の中では生涯学習の最たるものとなっている。これからも退屈しないで生きられようである。

【日本産業カウンセラー協会中部支部会員
産業カウンセラー 藤堂めぐみ】

(火曜日に掲載)

